

英語の授業で積極的に取り組めない生徒に対する 支援のあり方についての実践研究

岩坪 和美（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）

内野 成美（長崎大学大学院教育学研究科）

笹山龍太郎（長崎大学大学院教育学研究科）

はじめに

文部科学省の「教育指標の国際比較」（2013）によると、高等学校への進学率は98.5%となっている。ほとんどの中学生が高等学校へ進学してくる中、高等学校の多くは様々な問題を抱えているのが現状である。不登校生徒数は中学校で37人に1人、高等学校で60人に1人と言われている。高等学校における不登校となったきっかけとして、無気力、不安など情緒的混乱、学業の不振などがあげられている。PISAやTIMSSなどの調査結果から見ると、学力の最上位層の割合に変化は見られないが、低位層が増加している。学習意欲や学力向上などが喫緊の課題となっている。

文部科学省の「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（2010）によれば、学習評価は、児童生徒にとって自らの学習状況に気づき、その後の学習や発達・成長が促される契機となるべきものとしている。中でも、学習指導の一層の充実を図る際、児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価する個人内評価を積極的に活用することが有効であるとしている。このことから、児童生徒の学習意欲を高め、その後の学習や発達を促していくためには、個人内評価を積極的に活用して児童生徒の良い点を褒めたり、更なる改善が望まれる点を指摘したりするなど、児童生徒の発達の段階等に応じ、自分自身を評価する力を励ましていくことが教師にとって重要である。

第1筆者はこれまでの単位制高校での教職経験の中で、授業中に居眠り、私語、ぼんやりしている生徒、またノートをとろうとしない生徒など様々な生徒たちを見てきた。しかし、授業中の机間指導での様子や質問に答えることができたときの生徒たちの表情を見てみると、本当はきちんと授業を受けたい気持ちを持っていることがわかった。中学校時代の不登校経験や勉強不足から授業についていけない状態であるなど、本当は困っているのに言い出せない状況にあるのではないかと思うようになった。また、そのような生徒たちは自尊感情がとても低いように思われた。そこで、授業中に気になる様子を示す生徒たちに学習意欲をもたせるには、どのような支援をしていけばよいか考えるようになったのが、本研究のきっかけである。

本研究の目的

これまで述べたことを踏まえ、本実践では、英語の授業で積極的に取り組めない生徒に対して、個別のアセスメントに基づき、「個に応じた学習会」と「自他による授業態度評価とフィードバック」を行い、学習意欲にどのような効果をもたらすかを明らかにする（図 1）。

方 法

アセスメント

(1)対象校 県立 X 高等学校は単位制であり、中学時代不登校を経験している生徒、無気力、不安など情緒的混乱、学業の不振のある生徒などが在籍している。

(2)対象生徒 「授業担当者と担任が気になる生徒のうち、特別支援教育の視点から配慮が必要と感じられる生徒であること」、「授業に積極的に取り組めない原因が生徒たちの学力以外のところにあると推察される生徒であること」の 2 点を満たす 1 年男子生徒 4 名を対象生徒とした。

(3)期間と内容 5 月初旬から 6 月中旬にかけて授業観察、担任と授業担当者への聞き取りをおこない、6 月下旬から 7 月初旬にかけて、個人のニーズを把握するために、授業観察を継続した。さらに、10 月初旬の 2 週間の間、個別に面談を行い、対象生徒の学習面、意欲面、対人面の把握と理解を深めた（表 1）。

その後、授業観察、学習会と 1 学期末考査の結果から、指導方法を決定した。

表 1 対象生徒 A, B, C, D の主な特徴

	対象生徒A	対象生徒B	対象生徒C	対象生徒D
英語の好き嫌い	嫌い	好きじゃない	どちらでもない	苦手
学習面の特徴	<ul style="list-style-type: none"> アルファベットの区別が苦手である。 形が似ている単語の識別が苦手である。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業や学習に対してあきらめている様子が見られる。 中学時代からの学習習慣がない。 	<ul style="list-style-type: none"> 特徴的な学習スタイル（「覚えなさい」と言われたものを順番通りそのまま覚えていたことが推察される記憶法）。 単語の読み間違いがある。 中学時代からの学習習慣がない。 	<ul style="list-style-type: none"> アルファベットの読み書き（特に読み）に困難がある。 勝手読みや似た語との混同による読み誤りが見られる。 最初の文字や単語全体の形のイメージのみの推測による読み誤りが見られる。
授業中の様子	<ul style="list-style-type: none"> 真面目でがんばろうとする。 担当者の指示の聞き逃しや作業の見落としがある。 目立った行動が少ないので、注意を受けにくい。 	<ul style="list-style-type: none"> 他の授業でもぼんやりしていることが多く、自主的にノートをとることはあまりない。 目立った行動が少ないので、注意を受けにくい。 	<ul style="list-style-type: none"> 集中力がなく、寝るか私語をしている。 自主的にノートをとることはあまりない。 近くの生徒へ話しかけたり、ちょっかいをだしたりするので、毎時間強い注意を受ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 不注意のためか、言われたことをすぐ忘れてしまう。 離席はしないが、同じ姿勢を保持することが難しい。

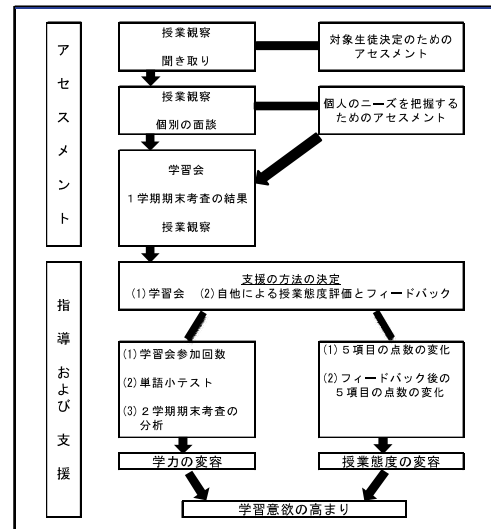


図 1 研究の概要図

学習会での支援の方法

対象生徒の授業における学習意欲を高めるために、学習方法を提示し、実践させ、学力を身につけさせる。本実践における学力とは、学習会の内容である試験

範囲の新出単語 30 個の意味をきちんと覚えて、言ったり書いたりできることを意味する。

期間 10 月下旬から 12 月初旬の 2 学期末考査直前までの約 1 ヶ月半、週 1～2 回昼休みもしくは放課後に計 11 回、30 分程度実施した。

方法 以下の方法で支援を行なった。(1) 毎回単語を覚えているか確認するために、小テストを実施した。(2) 取り組んだプリントは生徒専用の学習ノートに貼らせた。(3) 小テストの前に復習として、学習ノートの見直しをさせた。

内容 以下の内容を行なった。(1) 2 学期末考査試験範囲の新出単語 30 個の意味を覚えることに絞った。(2) 単語は 10 個ずつ 3 回分に分け、1 回に覚える量を少なくした。(3) 本人の学習方法を確認し、個に応じた学習方法を提示した。(4) 小テストの出題パターンを複数準備し、繰り返し同じ単語を解答できるようにした。

評価 学習会と 2 学期末考査の結果を基に、(1) 全 11 回のうち半分以上学習会に参加したか、(2) 単語の小テストの得点が上がったか、を評価する。

自他による授業態度評価とフィードバック

対象生徒の授業における学習意欲を高めるために、授業態度で持つべき視点を提示し、授業態度についての生徒による自己評価と第 1 筆者による他者評価を比較し、生徒に対して個別にフィードバックをすることで、自分の授業中の様子を見直させ、授業態度の改善を図る。

期間 10 月下旬から 12 月初旬の 2 学期末考査直前までの約 1 ヶ月半、週 1 回毎時間授業終了後、計 7 回実施した。

方法 以下の方法で支援を行なった。(1) 事前に授業態度に関する 5 つの観点を示した。(2) 評価は毎時間授業終了後に行い、授業態度評価シートを用いた。(3) 第 1 筆者も同じシートを使用して 4 名の授業態度を評価することを伝えた。(4) フィードバックする際に、自他評価をグラフ化したものを提示した。(5) 客観的に事実を伝えるために、授業観察記録も併せて提示した。(6) 良い点は具体的に褒め、改善点は一緒に対策を考えた。(7) 自他評価のグラフとフィードバックの結果は生徒のノートに貼らせた。(8) 対象生徒に対する注意喚起は、フィードバックの時のみ行なった。

内容 以下の内容を行なった。(1) 授業に臨むときの注目すべき 5 つの視点として、「始業前着席」「教材準備」「ノートやプリントへの記入」「授業担当者からの注意の回数」「私語や居眠りの回数」を挙げた。(2) 「事実のみ」、「授業の流れ」、「授業の場面における授業担当者と対象生徒の言動」、「発問とその解答の正答数」に留意し、毎時間授業観察の記録をとった。

評価 授業態度評価シートを基に、(1) 自己評価と他者評価の 5 項目の点数が、1 回目よりも点数が上がったか、(2) フィードバック後の自己評価の 5 項目の点数が上がったか、を評価する。

結 果

対象生徒の学習会参加と単語小テストの結果

(1)対象生徒 A 学習ノートを見直し、確実に覚えられるようになった。授業中に学習会で覚えた単語の意味を聞かれ、自信をもって答えていた (図 2)。

(2)対象生徒 B 学習会への参加や単語学習への取り組みが、4 名の中で一番少なかった。しかし、学習会で他の生徒の取り組みを見て、「勉強したら点数取れるかな」と口にするようになった。また、宿題プリントを欲しいと申し出るなど、勉強に対する姿勢に変化が見られた (図 3)。

(3)対象生徒 C 3 回目学習会後の授業中、「これ勉強した!」と気づき、そこから自分の授業態度や担当者の発問に注意を払うようになった。学習会では、他の生徒に単語の覚え方を教え、宿題プリントが欲しいと申し出るなどした。また、学習会最終日には、自分なりに学習のポイントをノートにまとめていた (図 4)。

(4)対象生徒 D 学習会が進むにつれて、聴覚的な理解はよいことがわかった。単語の意味を 20 個覚えるのみであれば対応できていたが、英文中の単語の意味を聞くと、覚えた単語であっても拾い出して答える事ができないことが多かった (図 5)。

個に応じた支援

(1)対象生徒 A アルファベットの区別が苦手だったため、指で形を作るなど繰り返しその特徴を説明した。その結果、自分でつぶやきながら区別して読めるようになった。また、形が似ている単語の識別をさせるために、最初に単語を発音させ、カタカナ表記で発音を書かせた。その後一緒に発音をして意味を確認する作業を行った。結果、本人専用の学習ノートを見ながら自分で発音し、覚えることができた。

(2)対象生徒 B 集中力がなかったので、声をかけて注意を喚起した。またフィードバックの際に、「授業態度評価シートの 5 項目のどれか、できそうなものからや

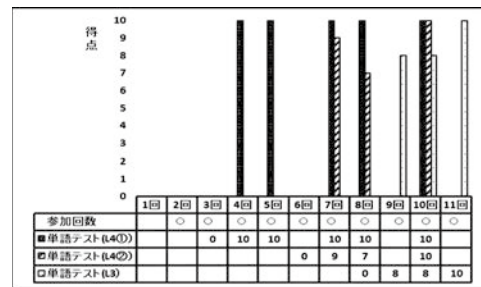


図 2 対象生徒 A

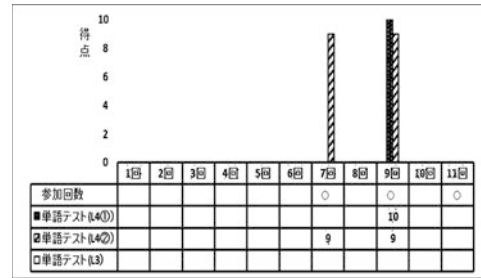


図 3 対象生徒 B

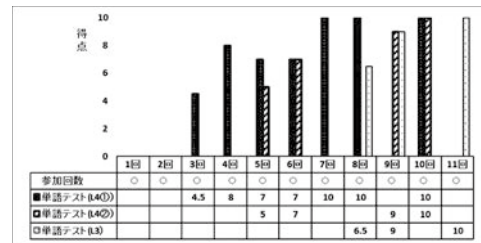


図 4 対象生徒 C

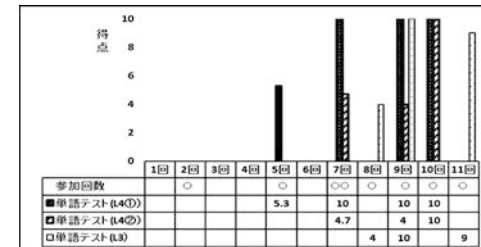


図 5 対象生徒 D

(注) Lesson 4 の単語は 10 個に分け、前半を①、後半を②とした。

(注) 試験範囲の新出単語を 10 個ずつ 3 回分に分けて小テストを実施した。

ってみよう」と促した。その結果、ノートをとることを目標にすると決心し、少しずつ授業中集中して取り組むようになった。また、授業や学習に対するあきらめを口にしていたので、学習会への参加を促し、他の対象生徒の取り組みや彼らが取り組んでいる学習ノートを見せた。その結果、学習会中、Aの学習ノートを借りたり、Cに単語の覚え方を聞いたりして、自分から学習しようと取り組む姿が見られた。

(3)対象生徒 C 特徴的な学習スタイル（単語の覚え方）を持っていたので、単語と意味をきちんと結びつけて覚えるように説明した。そして、単語のイメージを持たせ、ジェスチャーを加え、思い出しやすくなる工夫をさせた。結果、最終的には、ヒントやジェスチャーに頼らず、ほとんど正解できるようになった。また、単語の読み間違いも見られたので、音節単位に分解して、本人が読める単語との共通点を示し、読み間違いを防ぐ手がかりを教えた。その結果、自分の学習ノートを見直ししながら、「またこの単語間違えた」など、自分の間違いに気づき、読み間違いが減った。

(4)対象生徒 D アルファベットの読み書きの困難が見られた。一緒にアルファベットの確認をして、第1筆者が単語を読み上げた。Dは聞こえた発音をカタカナで書き、自分で読み直した。そのあと一緒に発音し、第1筆者が単語を1つずつ指で差してDに1人で発音させた。その結果、繰り返すことで読める単語が増えた。しかし、単語数が増えるにつれて記憶が混乱し、確実に覚えたはずの単語の想起が不安定になることがあった。また、勝手読み、似た語との混同、最初の文字やイメージ等の推測による読み誤りも多く見られた。新出単語の中で語頭が同じ単語をグループに分け、アルファベットの確認をして、個々の文字の音を単語の読みに結びつける指導を行なった。記憶の混同を最小限にするために、本人の好きな響きをもつ言葉やゲームなど身近なことと関連づけて覚えさせた。また、思い込んで判断しないように単語のつづりを確認させた。Dにとって覚えやすい方法がわかり、単語小テストの得点が着実に上がっていった。また、記憶が曖昧だと思ったとき、単語のつづりを確認するようになった。しかし、前回覚えたものも忘れてしまったり、同じものが時によって、できたりできなかったりしたことがあった。

2 学期期末考査結果

結果として、支援を行っていない生徒6名の平均の伸び率は下がったのに比べ、対象生徒の伸び率が上がった。その要因として、学習会と、自他による授業態度評価とフィードバックを行なったことが挙げられる。学

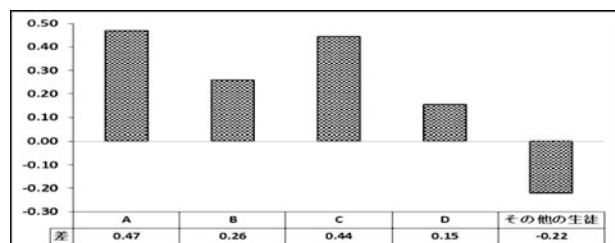


図6 2学期定期考査における得点の伸び率

(注1) その他の生徒とは、対象生徒4名以外の6名で、学習会などの支援を行っていない生徒6名を示す。

(注2) 表の数値は、対象生徒4名は各自の得点を、その他の生徒は6名の得点の平均を用いて算出した。

習会最終日が実習最終日であったため、2 学期末考査直前までの 1 週間、第 1 筆者が学習指導をすることはできなかった。しかし、この結果から、対象生徒が自主的に学習を行い、学習意欲の高まりが持続したことがわかった（図 6）。

自他による授業評価とフィードバック

(1) 対象生徒 A

初日と最終日における 5 項目の点数の変化 すべて 1 回目より上がった。

フィードバック後の点数の変化 4 回目の授業では、A は私語や居眠りをしないことを目標に上げて取り組んだ。次のフィードバック後の 6 回目の授業と最終日にはすべての項目が改善され、授業中集中力がとぎれることなく取り組んでおり、本人の目標も達成された（図 7, 8）。

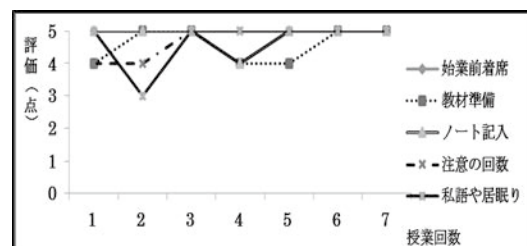


図 7 A の自己評価

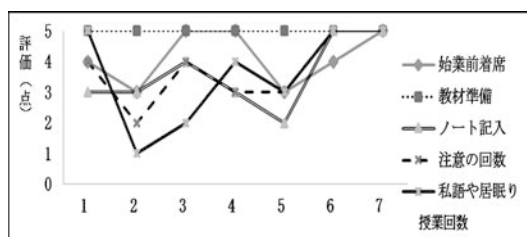


図 8 A の他者評価

(2) 対象生徒 B

初日と最終日における 5 項目の点数の変化 自己評価ではすべて 1 回目より上がった。他者評価では「始業前着席」以外の項目はすべて上がった。

フィードバック後の点数の変化 フィードバック後の 4 回目と 6 回目の授業では、改善されない項目があったものの、徐々に全体的に授業への取り組みが改善されていった。最終日には、本人の目標であった「ノートをきちんととる」項目をはじめ、ほとんどの項目で改善が見られた（図 9, 10）。

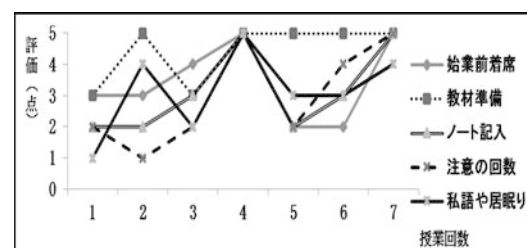


図 9 B の自己評価

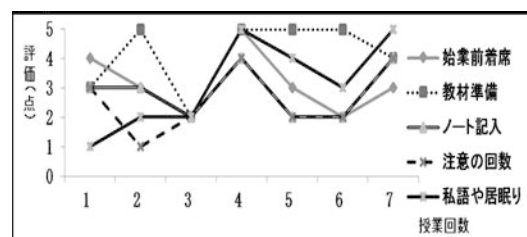


図 10 B の他者評価

(3) 対象生徒 C

初日と最終日における 5 項目の点数の変化 授業態度の良し悪しの波が激しかったが、すべて 1 回目より上がった。

フィードバック後の点数の変化 フィードバック後の 4 回目の授業では、5 項目を意識した発言が数回見られた。次のフィードバック後の 6 回目の授業では、

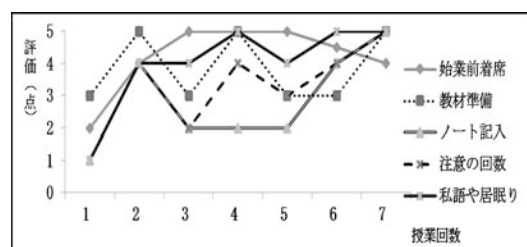


図 11 C の自己評価

「ノート記入」、「注意の回数」、「私語や居眠り」の項目で改善が見られ、授業態度が劇的に変化した。最終日には、前述の3項目をはじめ、ほとんどの項目で改善が見られた（図 11, 12）。

(4) 対象生徒 D

初日と最終日における5項目の点数の変化 自己評価ではすべて1回目より上がった。

フィードバック後の点数の変化

フィードバック後の4回目の授業で、授業態度評価シートを意識した発言が見られ、「ノート記入」、「注意の回数」、「私語や居眠り」が改善された（図 13, 14）。

学習意欲の変容

(1) 対象生徒 A 学習会で単語の意味を確実に覚え、授業中にその意味を正確に答えることができたため、自信をもって学習会や授業に取り組めたことが示されている（図 15）。

(2) 対象生徒 B 担当者の質問に答えることができず無言の状態が見られたが、学習会への参加後は、自己評価から「授業でノートをきちんと取る」という目標を立て、授業態度を改善する意識を持つことができたことを示している（図 16）。

(3) 対象生徒 C 支援前は授業中毎時間注意を受けていたが、学習会で単語の学習をし始めてから、授業中の自発的な発表が大幅に増えていった。個別に問題に取り組む時間が欲しいと申し出たこと、学習会で扱っていない分野にもかかわらず、自ら問題を解き、他の生徒に正解かどうかの確認を頼む姿が見られた（図 17）。

(4) 対象生徒 D Cと同様、学習会で単語

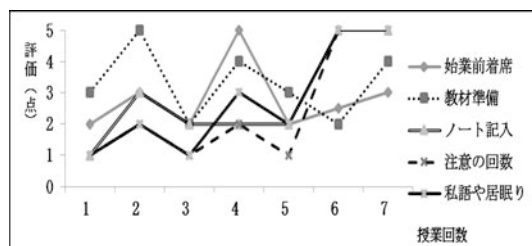


図 1 2 C の他者評価

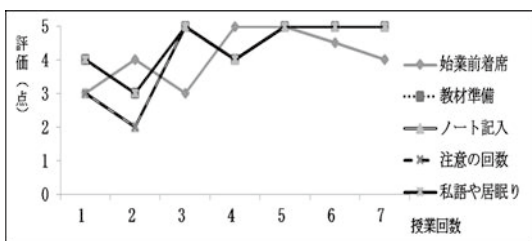


図 1 3 D の自己評価

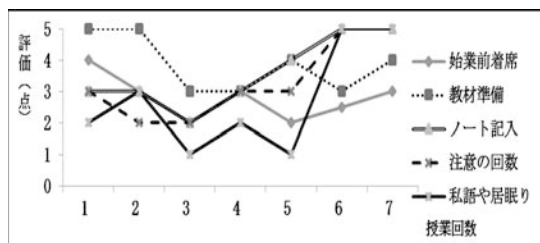


図 1 4 D の他者評価

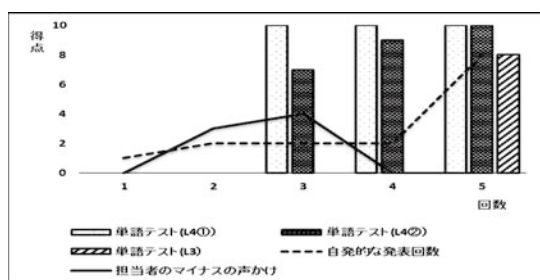


図 1 5 対象生徒 A

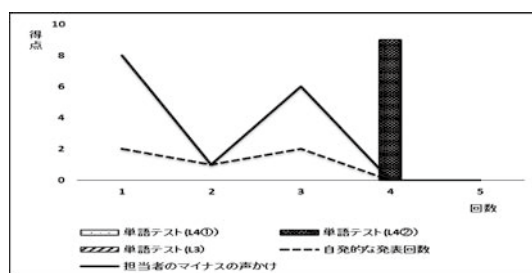


図 1 6 対象生徒 B

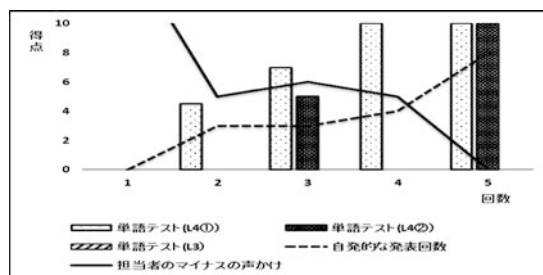


図 1 7 対象生徒 C

の学習をし始めてから、授業中の自発的な発表が増えていった。授業中に「自分で考える時間が欲しい。全員で一緒に取り組んだら勉強にならない！」と訴える場面も見られた。授業担当者からのマイナスの声かけがなくなった頃、授業前に、本人が授業態度評価の5項目の視点を口に出し、自分の行動を確認していた(図18)。

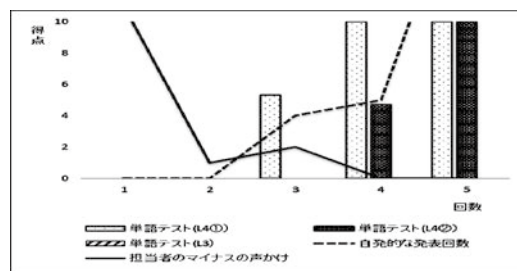


図18 対象生徒D

(注) 学習会と授業観察日が同じ回を取り出した。
 (注) 同じ範囲の単語テストは平均を出した。
 (注) 「自発的な発表」とは学習会で覚えた単語を自発的または発問されて正解したものを指す。

考 察

本実践では、英語の授業に積極的に取り組めない生徒に対して、個別のアセスメントに基づく個に応じた学習会、自他による授業態度評価とフィードバックを行い、生徒の学習意欲にどのような効果をもたらしたのかについて述べる。本実践における学習意欲とは、次の2つの側面を持つ。1つめは、自発的に授業に取り組む姿勢を保持することである。具体的には、顔を上げて担当者の話を聞く、ノートやプリントへの記入をするなどの視点を意識して授業を受けることである。2つめは、学力を身につけることである。本実践では、学力として、単語の意味を30個覚えることとしたが、学校や生徒の実情に合わせて、生徒の抵抗感が少なく、授業で学習した成果が表れやすいものを選択する必要がある。学習意欲を高めるためには、授業に直結している方法が適切であると考え、個別のアセスメントに基づく個に応じた学習会、自他による授業態度評価とフィードバックを行なった。

本実践では、支援前と支援中も継続してアセスメントを行なった。支援前のアセスメントでは、対象生徒の対人面や学習面に注目し、担任や授業担当者への聞き取り、授業観察(英語やその他の科目)、個別の面談など、支援前に、いろいろな場面で多面的に情報収集をすることができた。このことが個に応じた学習会の実施の際、非常に有効であったと考える。本実践では、授業や学習会の取り組みにおいて、対象生徒の様子から学習内容が理解しにくいと思われた場合、教材の難易度を調整したり、説明や指導方法を変えたりするなどの対応を行なった。このように、支援中もアセスメントを継続し、対象生徒の学習や理解の進捗状況に合わせて、指導方法や内容に修正が必要かどうかを決定することができた。また、対象生徒だけでなく、クラスの他の生徒についても、授業以外の行事、朝と帰りのSHR、掃除などの活動でかかわった結果、第1筆者の行う学習会に自主的に参加し、対象生徒に対して自然な形で学習を楽しむ環境づくりや、対象生徒を認める声かけをしてくれた。このことから、対象生徒に対する支援の内容と方法を決定し、修正が必要かどうかを決定するのにアセスメントは大切な役割を果たしていることが示された。

個に応じた学習会における対象生徒の取り組みと結果から、個別のアセスメントに基づく個に応じた学習方法を提示し、実践させることが効果的であることが示された。定期考査の範囲の中から、取り組みやすい単語の意味 30 個を覚えることに絞り、小テストを繰り返し行い、対象生徒に達成感を体験させることができた。さらに身につけた学習方法や自分の小テストの結果、間違えた単語の記録をノートに貼り続け、見直させることが、セルフモニタリングの役割を果たし、学習に対する自信を深めさせたと考えられる。対象生徒の中には、支援後半から自己を振り返るようになり、点数に結びつかないのは自分の努力不足ととらえ、目標を具体的に立てる者もいた。また、自ら難しい問題に挑戦しようとする姿勢が対象生徒の中に芽生えたことから、学習会は、学習に対して積極的に取り組む手立ての一つとして有効であることが示唆された。前田ら(2010)は英語学習意欲に関する実施調査を行い、英語があまり得意でない生徒にとって、単語の学習から始め少しでも英語をわかる喜びを体験させることが、学習意欲の向上につながる一つの方法であると述べた。本実践で工夫したことは、定期考査範囲の単語 30 個に絞り、1 回に覚える量を少なくして、授業で覚えた成果がすぐ表れることで、対象生徒が達成感を実感できるようにしたことである。また、毎回の単語小テストをノートに貼り続けることで、間違えた単語や覚えるのが苦手な単語を認識し、覚えた単語の数が増えていったことを可視化させたことである。このことから、本実践では、個に応じた学習会が学習意欲の向上につながる一つの方法であることが示唆された。

自他による授業態度評価とフィードバックでは、3 つのことが効果的に作用したと考えられる。1 つめは、自己評価をさせたことである。自己評価をさせることで、自分の授業中の様子を自己観察し、授業後に 5 項目を 5 段階による自己観察を行わせた。そして、自己評価の結果を自分専用のノートに記録し、毎時間ごとの記録を見直すことで、対象生徒は自分の授業態度がどのように変化しているかを継続して確認することができた。2 つめは、他者評価を行なったことである。筆者が対象生徒と同じ授業態度評価シートを使い、毎時間授業観察記録をとっていったことが、生徒による自己評価がかたよらないことにつながったと考えられる。3 つめは、フィードバックを繰り返したことである。自他による評価をグラフ化し、可視化させることで、対象生徒が自分の変化を把握しやすくした。また、米山・関(2010)は動機づけの観点から効果的なフィードバックについて述べていた。本実践で工夫したことは、フィードバックの際に、授業観察記録に基づき、具体的な点を褒め、改善すべき点を振り返り、対象生徒に「自分にできることは何か」を考えさせ、一緒に取り組める目標を立てた。そして、自他による評価とフィードバックの結果を自分専用のノートに貼り続け、見直させることで、対象生徒が自己モニタリングを促し、自主的に授業態度改善を図っていったことが示された。また、使用した授業態度評価シートの 5 項目は、対象生徒の担任が気になる生徒の授業態度を観察する視点を元に、作成した。対象校や対象生徒の実情

に応じた項目だったため、効果的であったと言える。このことから、学習会、自他による授業態度評価とフィードバックは、生徒の学力と授業態度改善に有効であり、授業における学習意欲を高めるのに効果があることが示唆された。

また、実践終了後でも対象生徒の学習意欲が高まったことが示された。同じ英語の授業を受けているが、支援を行わなかったその他の生徒の平均の伸び率は下がったのに比べ、対象生徒全員の伸び率が上がった。学習会最終日から定期考査実施まで、1週間近く日数があった。この間、第1筆者は対象生徒に定期考査の復習プリントを渡し、指導は行わなかった。対象生徒は第1筆者の支援がなくても、自主的に学習を継続することができたことが示された。

以上のことから、学習会、自他による授業態度評価とフィードバックを行うことが、授業と授業以外の学習の場において、対象生徒の学習意欲を高め、自主的な学習の継続に有効な方法の一つであることが示唆された。

結 論

(1) 生徒に対してアセスメントを行い、彼らの特徴を多面的に把握することは、対象生徒の特徴を活かした指導を行うために有効である。またさらにオンラインモニタリングを行うことで、生徒の学習や理解の状況に合わせて、教材の難易度を調整し、説明や指導方法を変更し、対応することができた。

(2) 個別のアセスメントに基づく個に応じた学習会を行うことは、生徒の特徴に合わせた学習方法を教えて実践させる機会である。覚えたことを授業で発表し、成就感を経験させ、自分の努力を肯定的にとらえる手段の一つと示唆された。

(3) 生徒に自分に適した学習方法を理解させて取り組ませ、自己評価によってセルフモニタリングしながら、自分の変化を実感するなど内的な部分への働きかけを行うこと、さらに、タイミングを逃さずに生徒の状態を正しく認識した声かけや事実に基づくフィードバックなどの外的な働きかけも併せて行うことが、積極的に取り組めない生徒の学習意欲を高めるための有効な手立ての一つであることが示唆された。

引用文献・参考文献

- 前田和彦・津村修志・小磯かをる・加賀田哲也（2010） 英語学習意欲に関する実態調査—テキストマイニングによる分析から—，大阪商業大学論集，158，77-90
- 文部科学省（2010） 児童生徒の学習評価の在り方について（報告）
- 文部科学省（2013） 教育指標の国際比較
- ゾルタン・ドルニェイ 著 米山朝二・関昭典 訳（2005） 動機づけを高める英語指導ストラテジー 3.5 図書文化